COVID-19 の流行が人々のマスク着用意識に与える影響に関する研究

田中葉月[1]　川崎利咲[2]

要旨

COVID-19 の流行によって，多くの人々がマスクを着用して生活を送るようになった．本研究では大学生を対象にしたアンケート調査を行い，マスク着用と社会規範の関わりや，マスクを着用し続けることが多い人の特性などについて調査した．分析結果は以下の通りである．質問から，周りのマスク着用率が回答者のマスク着用率に影響を与えることがわかった．また、感染リスクが明らかに無い状況でも，人がいるかどうかによりマスク着用率に有意に差があることがわかり，社会規範によってマスクの着用が促進されていることが示唆された．自らの意見と社会規範を問う質問から，マスクを着用すべきと考えている人の割合を実際より高く見積もっていたことがわかり，人々のあいだに誤った社会規範が形成されている可能性が示唆された．最後にマスク着用の要因を調べたが，今回の分析では個人の特性によりマスク着用率が変化するという傾向は見られなかった．

JEL 分類番号：　D82, I10, I18

キーワード：　マスク，社会規範，新型コロナウイルス感染症

[1] 田中葉月大阪大学経済学部 u006868h@ecs.osaka-u.ac.jp

[2] 川崎利咲大阪大学経済学部 u697615f@ecs.osaka-u.ac.jp

1. イントロダクション

COVID-19 の流行に伴い，自身の感染防止と周囲への感染拡大防止のために公共交通機関や店内でのマスクの着用が普及していた.

厚生労働省によると，季節を問わず，屋外や屋内での会話がない場合でのマスク着用は原則不要であるとされている．それでは実際に人々はマスクの着用が必要ない場面でマスクを外しているのだろうか.

本研究では，アンケート調査を通じて人々がマスクを着用する条件や環境を示し，また感染拡大のリスクがない中でのマスク着用には社会規範によるものが大きいと考え，本研究では学生に対するアンケートをもとに社会規範の影響を分析した.

2. 仮説

本研究では以下の三つの仮説を立てた.

【仮説１】

マスク着用の必要性を感じていない場面においても，マスクの着用は社会のルールであり，従わなくてはならない社会規範であると考えるため外せない人が多い.

マスクの着用はこの３年弱の間様々な場面で着用を義務付けられ，感染拡大を抑えるための社会のルールとして確立された．たとえ必要のない場面においても，それに反し，他人と別の行動をとることにためらいがあるため，マスクを着用し続けていると考えた.

【仮説２】

自分はマスクを着用するべきとは思っていないが，周りは着用すべきと考えているはずだという，多元的無知の発生によって，誤った認識による社会規範が形成されている.

多元的無知とはある集団の多くの人が「自分はある規範を受け入れていないが，他のメンバーのほとんどはその規範を受け入れている」と思い込んでいる状態を表している．多くの個人はマスクを必要のないものと感じつつも，自分以外の大勢は必要だと考えているはずという認識から，実情とは異なる社会規範が形成されていると考えた.

【仮説３】

個人の属性や選好は，マスクの着用に関して社会規範に従う傾向に影響を及ぼしている.

社会規範に従う行動は他人と同じ行動を取ろうとする同調性から生まれるため，互恵性や一般的信頼との関係があると考えた．マスク着用に関しての社会規範にも男女差などの属性による差が見られるのではないかと考えた.

3. データ

3.1.アンケート実施の概要

2022 年 10 月 20 日から 12 月 6 日までを回収期間とし，google フォームを用いて大阪大学の学生を中心に回答を得た．配布方法は LINE を用いて配布するほか，経済学部のある授業を履修する学生に対して CLE にリンクを載せる形で行った．有効回答数は 93 であった．

3.2.回答者の属性

表 1　回答者の属性

Q. 学年	4年	3年	2年	1年
	6	46	36	2

Q. 性別	男	女	その他
	61	26	6

Q. 学部	経済学部	それ以外
	72	21

4.分析結果

4.1.仮説 1 について①

質問Aでは，感染リスクのない状態での周りのマスク着用率が回答者のマスク着用に及ぼす影響を調べた．

感染リスクがない状況下でも，周りの 10 人中 10 人がマスクを着用している場合，82%がマスクを着用すると回答したが，周りのマスク着用率が下がるにつれ，マスクを着用するという選択肢を選ぶ回答者も減っていくことが明らかとなった．この結果から他人と同じ行動を取ろうとする社会規範によってマスク着用が促されているという仮説が支持される結果となっている．

次に質問 B では，感染リスクがない状態で，周りの何人がマスクを着用すべきと考えている時にマスクを着用するかを調べた．質問 B では主観的な他人への評価を基に態度の違いを測った．1

主観的な他人への評価であっても，質問 A の結果と同様に回答者のマスク着用の判断に影響を及ぼしていることが分かった．さらに，主観的な他人への評価は客観的な他人の行動よりもマスクの着用に強い影響を与えている傾向にあることもわかった。

4.2.仮説１について②

さらに，マスクの着用が社会規範によるものであるかを調べるために，質問Ｃ，Ｄを実施した．

質問Ｃは感染のリスクが明らかにない状況において，他人の目がある時にマスクを着用するか，外すかを問うものである．次に，質問Ｄでは同様に感染リスクのない状況であり，他人の目もない状況でマスクを着用するかを聞いている．二つの質問の違いは他人の目があるかどうかであり，質問 C でマスクを着用すると回答し，質問Ｄではマスクを着用しないと回答することは他人の目によってマスクの着用を選択していることを意味している．

結果は，マスクを着用すると回答した人の割合は質問Ｃで 25.8%であり，質問Ｄで 11.2%となり，その差は 14.6%であった．

「着用する」を１，「外したままにする」を０のダミー変数に変えたときの平均の差のｔ検定を行ったところ，ｐ値は 0.000206 となった．質問 C と質問 D のダミー変数の平均の差は有意となり，他人の目があるときにはない時に比べてマスクを着用する人は増える結果となった．マスクの着用は社会のルールとして捉えられ，社会規範に従うために促進されているといえ，仮説１が支持された．

4.3.仮説２について

質問Ｅでは感染リスクがないほどに他人との距離が離れているときにマスクを着用するべきと思うかを聞いた．そして，質問 F では質問 E で何%の人がマスクを着用するべきと回答したと思うかを聞いた．

その結果，実際にマスクを着用すべきと回答した人の割合は 31.2%であるのに対し，「マスクを着用すべきと考えている人の割合」を予想した平均値は 49.8%となり，約 19%もの差があることがわかった．また，全体の 61.4%が実際の値よりもマスクを着用すべきと考えている人の割合を過大評価したという結果となり，誤った社会規範が形成されているといえ，仮説２が支持された．

さらに，質問Ｂの結果から，周りの 49.8%がマスクを着用すべきと考えているとき，72%がマスクを着用し，周りの 31.2%がマスクを着用すべきと考えているとき，54%がマスクを着用すると推測される．

4.4.仮説３について

個人の選好や性質に関わるデータを用いて，個人の性質によるマスク着用の傾向の違い

について分析した.

まず，金澤(2013)に従って人間一般に対する信頼，すなわち「一般的信頼」を評価した．さらに， Dohmen et al.（2009）Perugini et al.（2003）に従い互恵・互助に関する正の互酬性を評価し報復に関する負の互酬性の評価を行った.

次に，回答結果から Bartling et al.（2009） によって採用されたアプローチによって，不平等回避を測定した.

表 2　回帰分析

	Estimate	Std. Error	t value	Pr(>|t|)
(Intercept)	0.169332	0.341756	0.495476	0.621658
学年	-0.03809	0.060069	-0.63415	0.527839
性別ダミー （男性＝１）	-0.03715	0.095831	-0.3877	0.699296
学部 （経済＝１， その他＝０）	0.059416	0.102672	0.578702	0.564458
プロソーシャルダミー	-0.01105	0.074301	-0.14875	0.882133
先行回避ダミー	0.149706	0.102772	1.456679	0.149219
後方回避ダミー	-0.11275	0.11453	-0.98446	0.327936
一般的信頼	0.008494	0.035924	0.236435	0.813715
正の互酬性 （３項目の平均）	-0.0442	0.057589	-0.7675	0.445103
負の互酬性 （3 項目の平均）	0.075457	0.044922	1.679717	0.097014

表３は回帰分析の結果である．全体の結果を見ると，性別や学年，またいずれの社会的選好についても，有意水準 5%で有意な差異は見られなかった．これにより，個人の属性や社

会的選好がマスクの着用に関して社会規範に従う行動に影響を及ぼしているという仮説３は棄却された．

５．考察

今回のアンケート調査から他人の行動が個人のマスク着用率に影響を与えるだけでなく，他人がいることそのものがマスク着用に影響を与えることがわかった．このことからマスクをすべきであるという社会規範が働き，人の目があると感染リスクがなくてもマスクを着用する傾向があると考えられる．

次に仮説２の分析結果から，マスクを着用すべきと考えている人数を過大評価していることがわかった．これについては政府や医師会が発表した強いメッセージによって，一時的に国民の全員がマスクを着用して外出をすべきであるという環境になり，家の外にいるときは常にマスクをつけなければならないという強力な固定観念が国民中に広まったことが原因として考えられる．

最後に，仮説３については有意な項目はなかった．これについては有意な差を認めるのに十分な母数が足りなかった可能性があるほか，被説明変数である周りに人がいる状況ではマスクをするが，いないときはマスクをしない人の割合がそこまで大きくなかったことが原因として考えられる．

以上より，COVID-19 の流行に伴うマスク着用意識が強力な社会規範となり，多くの人々が他人の影響を受けマスク着用の必要が無い場面でもマスクの着用をしていることがわかった．今後の課題として，社会規範からマスク着用を行う層の性質や特徴をよりはっきりさせるために，サンプルサイズを大きくするだけでなく社会規範からマスク着用を行う人の思考プロセスをより深く考察する必要がある．

引用文献

Björn Bartling, Ernst Fehr, Michel André Maréchal and Daniel Schunk, 2009. Egalitarianism and competitiveness. American Economic Review 99(2), 93-98.

Leonardo Bursztyn, Alessandra L. González and David Yanagizawa-Drott, 2020. Misperceived social Norms:women working outside the home in Saudi Arabia. American Economic Review 110(10), 2997-3029.

Thomas Dohmen, Armin Falk, David Huffman and Uwe Sunde, 2009. Homo reciprocans: survey evidence on behavioural outcomes. The Economic Journal 119(536), 592-612.

金澤悠介, 2019. 一般的信頼についての質問は何を測定しているのか？ ――潜在クラス分析をもちいたアプローチ――. 社会学年報 48, 95-113.